

Daichikyo News

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第6号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《広報宣伝部》

発行日：2020年3月 第6号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記→

QRコードをご覧ください。



新型コロナウイルスなどの感染症への

予防対策、頑張りましょう!!

もう一歩、やってみよか地域福祉!!

研修行ったら、実践者のすごい話を聞いた。真似できんわ。会議に出て仲間たちと実践情報の交換会をした。皆ようやるなあ。施設見学に出て日々の実践の様子を見た。すごいなあ。私たちは様々な団体、施設や個人の取り組みから間違いなく、いっぱい刺激を受けます。その時に受けた感動や高揚感をどう捉えるんか、どない自分の周り（地域）に生かすんかを考えて実践に結び付ける。これが地域福祉そのものやと考えます。あまり得意でない横文字で言えば、ソーシャルアクションて言うんかなあ。それぞれが施設の周りの地域を意識して、うちやったら、こんな風にできるわ。これ、やったらやれそうやなあ。社会福祉法人の社会貢献・地域貢献も取りざたされてるしなあ、いっぺんやってみよ。

今この、やってみよの決断・行動が地域福祉施設に強く求められています。

【施設と社協と住民】のトライアングルの連携、行動こそが新たな地域創りの要となります。机上の議論も大事。事前調査も大切ですが、思った通りになんかいきっこありません。

だから実践者はPDCAを繰り返すのです。実践して、あかんかったら、やり直したらええんです。とにかく、まずは、やってみんと話しにならんです。

最初の第一歩、そして周りを見つめて、もう一歩。

これってセツルメントと同じですねえ。



《 NPO 法人 大地協会長 》

倉光 慎二

大地協自然体験応援バザー

「長～居おつきあい令和もよろしくね♡バザー」
＝ 長居保育園会場 ＝



当日の朝まで天候が心配されたが、太陽が顔を出しこの季節にしては暖かく、最高のバザー日和となった。

長居保育園で開催されるのは、10年ぶりの3回目。施設内で大地協バザーの意味をもう一度確認し、準備が進められた。このバザーを盛り上げたいと言う職

員の想いから「かえっこひろば」を新たに作り、大抽選会、物品コーナー、バザーTシャツを復活させた。「かえっこひろば」は初めての試みであったが、他施設の方にアドバイスを頂いたり、当日は各施設のOBが力を貸してくれたおかげで「かえっこひろば」帰りの子どもたちは「たのしい!」「みてみて～こんなおもちゃとかえてん」と笑顔いっぱいだった。その他のコーナー、イベント、各ブースも盛り上がっていた。

しかし、長居の職員だけでは、これまでの盛り上がりにならなかったと思う。OBの力や、大地協に加盟する施設の職員一人ひとりが



大地協バザーの意味を知り、協力し合うことで成し得た事だと思う。

バザー後日、子どもたちからは「おもしろかったわ!」「〇〇食べてんで」「おいしかった～」「もう一回行きたい!」と、嬉しい声が届き、保護者の方からの「いつものバザー（長居保育園のバザー）とは、また違った楽しさ

がありました。ところで大地協って何ですか?」という質問から「大地協ってね、セツルの家って言うのがあってね・・・」とわかりやすいところから話しながらバザーのもう一つの意味を感じる事ができた。

これからも大地協バザーが様々な地域で開催され、どんどん輪が広がって欲しいと思った1日だった。

加盟施設、職員の皆さまご協力誠にありがとうございました。

《 長居保育園 》 大山 彬子

日本地域福祉施設協議会 第24回全国地域福祉施設研修会

学生セツルメントと再会しよう
～文化と教育を接点として～

2020年2月15日(土)～16日(日) 日本福祉大学東海キャンパス会場

これまで、保育園で働く保育士という立場から子どもたちと関わる中で、沢山の親子と出会ってきました。仕事と子育ての両立に悩まれる保護者、ひとり親で孤立している保護者、とにかく子育てが不安で愛情のかけ方がわからなくなる保護者など、ひとり一人のケースは違いますが、どの保護者も子どももその日その日を必死に過ごしています。

そんな、親子が少しでも安心して暮らしていくことができるには、私たちに何ができるのかというのは常に考えていることです。今回は他施設の取り組みなどを聞いて、何か得られるものがあればと思い、第2分科会の「地域福祉と子どもの暮らし」に参加しました。

第2分科会では「保育園」「児童養護施設」「ボランティア団体」「放課後児童クラブ」の4施設からの発題がありました。もちろん、取り組み内容は異なりますが共通していることは「居場所」「つながり」といったことではないかと感じました。「ここに居れば(行けば)安全・安心である」と感じられる場所や「誰かがいる・助けてくれる」と感じられることは自己肯定感にもつながり、そのことは生きていく糧にもなっていくということを再確認できたように感じます。

また、様々な関係機関がつながることで、いろいろな側面からのアプローチも可能になっていき、より良い支援・より良い地域社会を作ることになるのではと考えます。発題者の一人の方が「赤信号はわかりやすいけれど、黄色信号はわかりにくい。誰も無関心なわけではない、見えない(見えにくい)から何もできないのです」と話されており、見えない問題・課題にこそ目を向けていく力をつけていくことの重要性を感じました。

阿部志郎先生がおっしゃられた「なぜ、自分がここにいるのか?」常に自分に問いただしていきたいと思えます。

《 望之門保育園 》 森舎 孝子



熱戦!! 子ども将棋大会!!



「よろしくお願いします!」と大きく元気な声が響いたかと思えば、一転、静まり返った会場には駒を置く「パチン」という音だけが鳴り、子どもたちの真剣な顔が広がっていました。

1月11日に行われたこの将棋大会は、地域の子ども研究会に所属している施設の中から、有志が集まった施設の子どもたちが参加する大会です。今回も小学1年生から中学生まで、多くの腕に覚えのある棋士たちが集まってくれました。

個人戦では名人リーグ・金リーグ・銀リーグの3リーグに分かれ、各施設の将棋クラブなどに所属し毎日腕を磨いている子から、駒の置き方・動かし方を教えてもらったばかりという子までが集まり優勝を目指して対局を続けていきました。普段の実力を存分に押し切り勝ち進んでいく子もいれば、思ったように流れをつかめず負けてしまい悔し涙を流す子も見られました。



真剣な表情で駒を打つ子どもたち

個人戦の次の団体戦では各施設から実力者を5名ずつ選抜し戦っていきます。勝って全員で喜び合う姿はもちろん、負けてしまった子も残ったチームメイトの勝ちを祈って静かに応援する印象的な姿も見られ、チームの絆を感じることが出来ました。

自施設の子どもたちは早々に負けてしまいました。しかし帰り道には「〇〇の子は強かった」「来年はメンバーを集めて団体戦に出たい!」「そのためには月曜から練習だな」と悔しさ以上の物を得るいい経験となってくれたようでした。

施設の子同士でしか指したことのない子ども達にとって外の世界を見て得るものがあり、職員にとってもそんな子ども達のいつもと違う姿を見ることが出来た、有意義な大会となりました。次回の大会こそは自施設の子ども達も上位に名前を連ねるために練習に励んでいきたいと思います。



指導棋士十六段 谷川勝敏氏と子どもたちの多面指しの様子

《 四貫島友隣館子どもの家 》 荻野 遙馬

「今私たちが考えたい事」 ~地域の子育て支援研究会に参加して~

今年度、子育て支援研究会では4園が集まり日々の保育の中での悩みや自施設で工夫している事など様々な意見交換をしてきました。意見交換の中で特に自身の保育について振り返り、考えたテーマは「子どもの人権について」です。

「子どもの“人権”」を軸に考えた時、幼児や学童児など自分の思いを言葉にして伝える事ができ、受け取り側の保育者も“今自分の思いを主張してくれているな”と分かりやすく、受け止めてあげられなかった時にも“子どもの人権を守っていただろうか”と立ち返ることができると



和気あいあいみんな語り合う様子

思います。しかし保育者が子どもの人権について意識して関わっていない場合には、乳児や障がい児の人権について振り返る機会や改めるきっかけはどういったところなのだろうか」と討議しました。

日々の保育の中で子どもの人権を第一に尊重し遊びや生活を送っていくという根幹は頭では分かってはいるものの、保育者の都合で子どもに声を掛けていることは無いかと意見交換しました。私自身もそのような行動をとってしまう事があり、改めて自身の保育を振り返る良いきっかけとなりました。

保育の中で、子どもの人権・子どもの主張と、保育者の育ってほしい願い、そのための保育内容がお互いに良いものとなるよう、子どもの人権に対する意識を高め、時間に余裕を持って活動を設定する事や、次の活動が迫っている中で「まだしたい!」という子どもの気持ちを受け止めながらも気持ちが切り替えられるような、保育者側の技術も必要だと感じました。

保育の中での小さな悩みを、他施設の職員・様々な年代の人に気軽に聞くことが出来る子育て支援研究会という環境はとても貴重だと思います。他施設であっても同じ保育者だからこそ解かり合い意見し合えるのだと思います。子ども・保護者・保育者が日々楽しく安心して過ごせるような工夫を研究会で情報共有していきたいです。

《 やまと保育園 》 鶴野 夏美

学生セツルメントと私たち

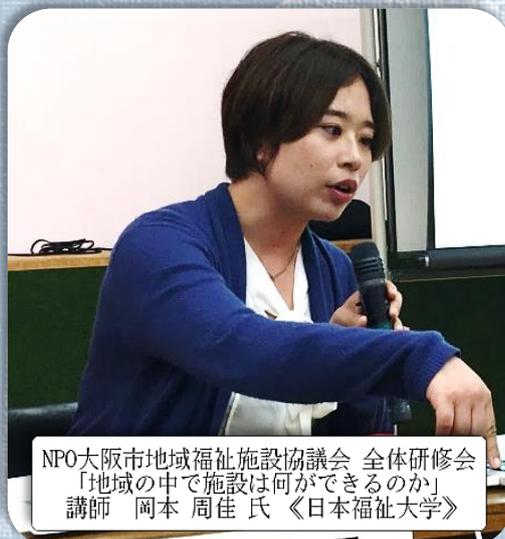
- 地域の中で施設は何ができるか -

10月18日午後7時から育徳園で全体研修会が開催されました。「地域の中で施設は何ができるか」という私たちの大きなテーマの下で、「学生セツルメントの歴史と実践」について岡本周佳さんからお話をいただきました。岡本さんは大阪府大を卒業後、大阪で児童福祉の仕事に従事しながら、日本福祉大学の博士課程で学生セツルメントの歴史を研究してこられました。自らも元セツラーであり、現在残されている多くの記録を整理し、オールドセツラーへのインタビューも重ねておられます。内容は、私たちが2月の全国研修会の議論に向けて準備する意味をもつ大切なものでした。

岡本さんはまず、E. デニソン、A. トインビー、S. バーネットらの「セツルメント創成期」から、日本でのセツルメント運動全体の歴史を概観し、その中で東京帝国大学セツルメントに始まる戦前の大学セツルメントの活動、戦時下に解散させられた経緯を説明した上で、戦後の学生セツルメントの今日に至る歩みを明快に示されました。地域に入ること、人格的接触を基本とすること、学びを広げ、生きたものにする、貧困を生み出す社会の現実を把握し、地域に働きかけアクションを共に進めること、学生の自己形成を行うことなど。学生が、地域の人々の生活に学び、その必要に応じて保育、学童保育、保健・医療などの実践を重ねてきた歴史から、私たちが学ぶ課題がたくさんあります。

戦後の学生セツルメントは、学生が主体的に運営するサークル活動の性格をもって再建され、各大学に広がり、

1955年には全国学生セツルメント連合も組織されました。各地域組織も生まれ、1966年には全国で1万人を超えていたことは驚きです。その後、1970年代からの社会の変化、地域福祉をめぐる動きに対応して、統合保育、学童保育、作業所づくり運動、高齢者福祉への対応など、初期の目に見える貧困問題から地域の新たな課題に対応する動きへと歩んできた経緯がありました。しかしその後今日へと社会福祉の政策・制度枠組みの変化、大学教育と専門職資格化の動き、ボランティア・市民活動の広がりの中で、学生セツルメントは次第に衰退し、その意味と役割が問われてきました。そこには学生セツルに固有の問題もありますが大地協の歩みと共通するものがあります。



講演を聞いて、あらためて学生セツルメントの歴史と現状から学ぶ必要を思いました。くわしくは別の機会に述べますが、これからの取り組みの三つの課題を思います。

1つは、セツルメントの精神が、学生セツルの中でどのように受け継がれて

きたかを考え、セツルメント型施設との共通の原点を確認すること。そして私たちの仕事の中で、また大地協の中で今日的に発展させることです。それは、人間の根源的な尊厳を思い、互いに理解する関係のあり方、一人ひとりの生活・発達・生きる意味に寄り添いつつ、社会問題としての解決の道すじを考えることであり、人権、平和、運動性につながるものです。

2つは、社会福祉施設が、学生セツルメントや学生の諸活動と、どのように地域で連携・協働するかです。愛染園はじめ学生セツルと施設の協働の事例がありました。また学生セツルから施設が生み出された例もあります。災害時、緊急時の協働も数多く見られます。今、NPOや住民活動、ボランティアとの可能な関係をどう創り出すかです。

3つは、組織のあり方の問題です。これは学生セツルとは異なりますが、個々の施設と職員の働き、大地協、日地協の目的と役割を、もう一度考えることも大切な点です。

「地域の中で施設は何ができるか。」社会福祉・地域福祉とは何をめざすことか。そして大地協だからこそ出来ることは何か。私たちが目指す目標と、現実に置かれている条件を把握し、刻々と変化する新たな問題に立ち向かいながら、未来を見つめて、さらに話し合ってみたいと思います。

(岡本 周佳さんの講演を聞いて)

永岡 正己

訃報

いつも大地協を支えてくださった 阿さひ保育園 園長 青地正壽先生が
2020年1月17日ご逝去されました(享年75歳)。心よりご冥福をお祈りいたします。